アジア女性フォーラム

四つのPとたたかうアジアフェミニズム

Poverty（貧困）Prostitution（売春）Patriarchy（家父長制）Pollution（公害）

「アジアフェミニズムの地平をひらく」をテーマに掲げたPP21アジア女性フォーラムは、八月十二日から三日間、横浜戸塚区の横浜女性フォーラムを会場としてひらかれた。海外からの参加した女性活動家は十五ヵ国三九名、日本各地からは約四七〇名が集まった。

さらに八月十五日には東京の山手教会で大衆集会「アジアの女たちと語る夕べ」をもち、約六〇〇人が参加した。

アジア女性フォーラムを主催した実行委員会は個人参加の形をとったが、七〇年代以降日本国内の女性解放運動を担ってきた潮流、組織、団体の多くが参加、フェミニストグループから労働運動、地域、消費者、反原発まで含めて最近では出色の幅の広い女性たちの連合が実現したことを強調しておきたい。

実行委員会は「女性差別を土台にした日本の経済大国化を女性の側から撃つ。アジアの女性とともに二一世紀のビジョンをつかみたい。女たちのオルタナティブなしには、二一世紀の日本とアジアのオルタナティブは考えられない」という認識から「アジアフェミニズム」をキイワードとして提起した。「私たちが日々この社会で直面する差別と抑圧、性的暴力といった反女性的な体制がアジア・第三世界に向けて行われている侵略、収奪そして差別の構造と表裏一体であることに気づかないわけにはいかない」にもかかわらず、「先進国と開発途上国、第一世界と第三世界、北と南などと表現され厳しく分断されている中で真のシスターフッドで結ばれることは、理念的には可能であっても現実的実践としては非常に難しいことを覚悟しなければならない」ことを、実行委員会は数度の学習会で確認し合った。（日本の実行委員会の基調報告はオルタナティブ資料集第2集に収録）。

海外参加者の側からはカムラ・バシン（インド）が、「開発と女性」というテーマで基調報告を行った。「ごく短期間の滞在ですが日本の女性について多くのことを確かに学びました。原発に反対している日本の女性が何十万人もいること、買春観光に反対している女性もたくさんいること、日本の女性たちは自国が他の諸国を搾取することに不満を抱いていることを知りました。日本は『日いづる国』（Land of Rising Sun）といわれます。日本の女性が強くなって、この国が『娘が立ち上がる国』（Land of Rising Daughter）として知られるようになってほしいと思います！」というカムラのよびかけに、会場の女たちから共感の拍手がわいた。

「現在の開発は競争だけでなく自然の破壊も招いた」というカムラは「悪い開発」（mal-e development）から女性中心の開発へ移行すべき時だと強調した。「現在の開発モデルでは、アメリカや日本など少数の先進工業国が世界の主要な資源を支配し、少数の巨大企業がますます規模を拡大しつつある。第三世界では少数の金持ちが資源と決定権を握っている。圧倒的多数の人々は貧困の中に置かれたままだ。・・・搾取に基づくこのような開発は多方面にわたる破壊をもたらしてきた。

アジアでは女性のパワーが民衆運動を支えてきた。農民女性、少数民族の女性、都市の女性労働者たちの戦闘性と団結を示す例は数限りない。

現在の社会・経済構造を変えることが開発。それは資源と決定権を再配分することを意味する。私たちの行動のひとつひとつが現在の搾取構造に挑戦するものであるべき。『開発』とは本来、権力を持たない人々に権限を与えることを意味する。団結することで権力が獲得されれば、貧困層が権利を主張するために結束し、権力の均衡を自分たちに有利な方向に変えることが開発。

自然と人間の相互依存に気づき、執拗に余剰を追い求めることを止め、持続可能で全体の循環を考える開発ー物質的価値より精神的な側面を、換金作物より食糧を、数量面の変化にとらわれるより質的変化を求めていくこと。

アジアの私たちは日本のフェミニストと互いに尊敬と信頼をわかちあいたいと願っている」

二つの基調報告を受けて始まった三日間のプログラムは四つの分科会の「みっちり討論」のほか、バザール、アジアの料理教室、ヨーガ、整体などが並行して行なわれ、会場は午前九時から午後九時まで熱気にあふれ、ビデオ班が走りまわった。

分科会報告

「出稼ぎ女性と人権」分科会では、八〇年代に入ってアジアから日本への出稼ぎ女性が急増している問題を取

上げた。年間七〜八万人にも達する出稼ぎ女性の七〇％以上がフィリピンから、その次に最近増えているのがタイ女性、ほかに台湾や韓国からも来ている。大部分は不法　滞在者として一人一五〇万円から二〇〇万円で売買され、性産業の最底辺で売春を強要され、暴力や麻薬、ピンパネなどさまざまな人権侵害を受けている。性差別とアジア人蔑視の人種差別という二重の差別の犠牲になっているのである。なぜそんなに多くの女性たちが日本に出稼ぎにくるのか、まず送り出し国と受け入れ国日本の経済格差、南北問題が指摘された。また、送り出し国については、フィリピンやタイの参加者たちから貧困や失業の問題、ゆがんだ経済開発による国内の貧富の格差や消費文化の影響、国内での売買春の拡大など、階級、性、人種の三重の差別が貧しい女性たちを海外へ押し出していることが指摘された。

一方、それにも増して切実に問われたのは受け入れ国日本の状況である。性産業が肥大化して日本の女性だけでは需要に追いつかず、より利潤の上がるアジアからの女性の輸入でまかなうようになったという構造がある。四〇〇年間にわたる公娼制度と資本主義の下での性の商品化が結びついて日本特有の買春文化が形づくられているといえる。それは日本の女性の置かれている状況ともつながる。賃金差別や職種差別などによる低賃金、パートタイマー化など、経済的自立が困難であるため夫に依存し、従って夫の国内、海外での買春を黙認せざるを得ない実情がある。

この分科会では、フィリピンなど第三世界の女性から日本の女性に対して、なぜ出稼ぎ女性問題の根本原因である日本の帝国主義とたたかう政治闘争をしないのかときびしい問いかけがあり、性暴力は職場の女性差別といった個別のたたかいを重視する日本のフェミニストとのずれが表面化した。しかし、日本の女性たちはまた、日本のアジアへの経済侵略を担う企業戦士を支えていることは否定できない。したがって、日本の女性に対してもアジアの女性に対しても抑圧的な日本の男社会を変えていく必要がある。そして出稼ぎ女性の人権を護るための国内、海外のネットワーク作りやＯＤＡを出稼ぎ女性支援プロジェクト、女性の雇用創出に使えるよう働きかけるなどの行動提起がなされた。

「からだ・環境・技術」分科会では、科学技術の発達が一方では原発など巨大科学による環境汚染で、さらに遺伝子組みかえや体外受精、胎児診断など生命を操作できる生命工学で私たちの生命がおびやかされていることから、技術の使用に関して、だれのための技術か、社会的合意をつくっていく必要があると指摘された。

とくに、女のからだが科学技術のターゲットとなっていると、バングラデシュやインドやインドネシアの女性

たちから、人口抑制政策の問題が出された。不妊手術を強制されたり、デポプロベラやネットエンなど長期ホルモン避妊注射、ノアプラントという五年間有効という埋め込み式ホルモン避妊剤など、有害な副作用が憂慮される避妊薬で第三世界の女たちのからだが傷つけられている。

このような子どもを産ませないための技術に対して、日本など先進工業国では、産ませるための技術が開発されている。体外受精などである。また「量」を減らす、つまり子どもの数を減らすというアジアの国々での強制的な人口抑制政策に対して、日本では自ら選ばせる形で「質」を管理する人口政策がとられている。胎児診断やDNA診断などの技術である。そのどちらも女たちのからだを国の利益のために人口政策の手段にしている点では同じことだととらえる必要がある。産む産まないを決める生殖の自己決定権など、女性が性的自由をいかにして手にするかが課題といえる。産む機能や技術だけを考えるのではなく、他の社会的な条件、政治や経済の仕組み、家父長制、家族制度などを変革して、女性が人間として扱われるようにしない限り、生殖の権利も手に入らないのである。

第三世界の女性たちは、一度、国による性の管理を受けているが、もう一つ、第一世界の利益のための開発によってからだを傷つけられている。たとえば、ボパール毒ガス漏洩事件は何千人というインド人を殺し、女性たちが次世代まで傷つけられた。インド政府と加害企業の米国ユニオンカーバイドはその責任をとらなければならない。

「女性・開発・援助」分科会では、まず、開発政策が女性にどのような影響を与えたのか、シンガポール、インドネシア、マレーシア、スリランカ、ネパール、パキスタン、インド、韓国の参加者から生々しい報告を聞いた。国によって表れ方に違いはあっても、開発のあり方が女性にネガティブに作用したことがそこから浮き彫りにされた。

一つは貧困の問題で、多くの国で、貧困線以下の人々が二〇%から六〇%も占め、女性の失業率はフィリピンを初め各国とも高いことが指摘された。女性の識字率も男性に比べて低く、ネパールでは政府発表でもわずか一八%、インドネシアでは非識字者の三分の二が女性である。保健サービスも各国とも不十分で乳児死亡率はなかなか改善されない。

次にはっきり見えてきたのは性差別の問題である。各国とも、家庭内暴力、レイプなど性暴力がひどくなり、売買春や国際的人身売買、ポルノなど性の商品化も深刻になっている。

さらに、軍事的暴力は政治的抑圧、人権弾圧が女性た

ちを苦しめている。フィリピンでは軍事化、スリランカでは人種紛争による暴力、シンガポールとマレーシアでは国内治安法（ＩＳＡ）による弾圧、投獄者などきびしい状況が報告された。

もう一つ、環境破壊が女性の健康をおびやかし、生活を圧迫している問題もマレーシア、インド、韓国などから報告された。

このほか、多国籍企業を通じた消費文化が浸透して、女性の価値観をゆがめている問題も無視できないと指摘された。

このような各国からの報告で、先進工業国の利益のために人間を犠牲にして進められている開発は、女の力を弱め、分断する結果をもたらしていることが明らかになったのである。

先進国の中でも、アジアで経済大国として巨大な力を振るう日本の責任が、各国の参加者からきびしく問われた。一つは、世界一にふくれ上がった日本のＯＤＡが受け入れ国の女性に苦痛を強いていると批判された。マレーシアのサラワク川では日本のＯＤＡによるバタン・アイダム建設で先住民のイバン族が強制移住させられ、補償金を支給されて現金経済に組み込まれ、結局は男性の手に入って、女性たちは一層、労働を強いられた。またスリランカでも港や空港やマハベリ川開発計画などの日本のＯＤＡプロジェクトは結局、日本企業のためであることが指摘され、南太平洋諸国のＯＤＡも日本の漁業資本などの利益のためであることが暴露された。したがってＯＤＡの女性への影響を監視する必要があり、すでに日本の女性とタイ、フィリピン女性との共同調査を進められているが、このような日本とアジアの女性のＯＤＡ監視ネットワークをつくろうという提案もあった。また民間女性の「もう一つの」援助活動のあり方も指摘された。日本の多国籍企業がアジアの女性たちにおよぼしている影響については、マレーシア在住のオーストラリア女性から、日本式経営が女性労働者を巧妙にコントロールして、企業に忠誠心を持たせるようにしていること、日本人ビジネスマンが女性労働者の実情とかけ離れたぜいたくな生活をしていることなどの調査結果が報告された。このようにＯＤＡと企業進出を通じての日本のアジア太平洋への経済侵略に歯止めをかけるには、日本の浪費的な生活、拝金主義的な価値観の見返しがまずなされる必要がある。

「働く権利と女性労働運動」分科会では、まずアジアの工業化二〇年で、農村から出てきた年の女性労働者たちは長時間労働、男性よりも低い賃金、健康障害、性的いやがらせなど抑圧・搾取の構造は何ら代わっていないことが明らかにされた。他方、日本の女性労働者は、パート、アルバイト、派遣労働など不安定雇用、男性の賃

金の五二%という低賃金と性別職務分担、ME化による労働密度の強化（かつての二時間労働に匹敵する八時間労働）などの問題に直面している。

また、日本企業の海外進出は加速化し、現地海外雇用労働者は一一七万人にも達しただけでなく、その半分はアジア地域に集中している。その結果、日本国内では八〇万人の雇用減があり、女性労働者やパート労働者がまず解雇され、サービス産業に移っていった。

日本多国籍企業は日本の性差別的社会システムまで輸出して、家父長性をうまく利用した労務管理で女性労働者をコントロールしているという問題も指摘された。

このような状況の下で、女性労働者の組織化、たたかいがどのように進められてきたか、女たちは家父長制社会、軍事抑圧体制をはねのけて、女たち自身の労働組合作りを進め、また労組の民主化の先頭に立ち、賃上げや産休や育児時間、保育所設置、解雇された女性労働者の支援活動など、働く権利のための活動が韓国、フィリピン、インドネシアなどから報告された。日本の場合は、男性中心の労働運動が女性独自の要求を押さえ込んできたが、既成の労組執行部に女性が参加するだけでなく、女性の労組を作る動きや、パート労働者の組織化、かけ込みセンターや相談活動などの試みが始まっている。

日本とアジアの女性労働者の連帯は、海外勤務の日本人の労働条件を調査するといった企業別組合、男性主導の既成労組のやり方でなく、女たち自身によるネットワーク作りに力を入れ、アジアの国々でのストなどを支援し合うことを誓い合った。

以上、四つの分科会を終え、最終日の全体会議では「アジアフェミニズム大討論」が行われた。

「フェミニズムだけでは問題は解決しないが、悲観的になることはない。個人としても共同体の一員としても二重の基準をもたないこと、男女が力をあわせる運動と女性だけの運動の両方をもつこと、多様性を認めあうことが大切だ」

「アジアと欧米のフェミニズムに違いはない。ニューヨークでレイプの危険にさらされるのとアジアでレイプの危険にさらされるのは同じこと。アジアはみな同じではないが、さまざまな知識がつみ重なって進んでいくプロセスがフェミニズム。だからダイナミックでエキサイティングだ。南北による対立、イデオロギーによる対立階級、人種差別、家父長制――あらゆるものとたたかう時、自分たちの内面をみつめて、フェミニストになることが大切だ」

「現代は生存のためのたたかいの時代。隣人を助けるのがフェミニズム。四つのPとたたかおう。売買春（prosutitution）、貧困（poverty）、家父長制（patriarchy）、公害（pollution）の四つと」

「世界を一つの市場とみることに対して、私たちは海を越えてたたかわなければ。そして強くならなければ。アジアフェミニズムとは一つのプロセス。その内容は女たちのネットワークをひろげ、顔のみえる関係をつくる中でこそできるもの」

「フェミニズムはすべての問題を女性の立場から考えること。家父長制とのたたかいにおいては、たとえ女の顔をした相手ともたたかう必要がある。開発を考えるときは開発か自然かではなく、衣食住のほかに人権、愛される権利、自由、安全、創造性も含めた基本的ニーズをみたす開発を、といえるのではないか。資源をわかちあい、今ある権力を分散し小さくして独裁・独占を許さない視点をもとう。そして破壊され分析された地球を縫い合わせる運動を私たちは始めよう」

どこのPP21実行委員会もそうだろうが、アジア女性フォーラム実行委員会も財政では苦労した。「女の時代」とかなんとか言われるが、そう簡単に資金は集まらない。四苦八苦の毎日だったが、ニューヨーク在住のオノ・ヨーコさんがポスター制作に気持ちよく協力して下さったことは嬉しかった。オノさんのメッセージがいい。

「夢をもとう
女の知性
女の愛
女の力で
世界を変えよう
宇宙の鼓動に耳傾けて」

インドのカムラ・バシンも歌をうたった。

「くびきをふりほどき、女たちはやってくる
女たちがやってくる、抑圧をはねのけ、
新しい世界をつくるため
今こそ沈黙を破り
暗闇をつき
おそれと依存を捨て去り
自由になって
幸福をまきちらし
女たちは新しい世界をつくる」

水俣会議で女性フォーラムの報告をおこなった松井やよりさんとニガト・カーン（パキスタン）は、「アジアフェミニズムの地平」をそれぞれつぎのような言葉で表現した。

「四つの分科会を通じて、女たちが低賃金・周辺労働者として、性的対象物として、生殖の道具である産む性として、二〇世紀を特徴づける開発の犠牲にされてきたことが明らかになりました。貧困の女性化、女

性に対する暴力、性の商品化、都市への移住や海外出稼ぎによる家族とコミュニティの崩壊、消費文化と物質主義、軍事化による人権侵害、自然環境の破壊など女性の人権を侵し、苦痛を強いている状況が浮き彫りにされたのです。言い換えれば男性が女性を支配する男性優位の家父長制、第一世界が第三世界を搾取する不平等・不正な国際的経済構造、男性の手中にある科学技術いよる自然破壊、このような三つの敵とたたかうことがアジアフェミニズムへの道であることが明らかになりました。

ディベロップメントという言葉には日本語で「開発」と「発展」という二つの訳語があります。「開発」は経済的、物質的、破壊的、暴力敵なディベロップメントを意味し、「発展」は社会的、文化的、精神的、人間的、創造的な向上を意味します。私たちアジアフェミニズムんがめざすものはこの創造的な発展です。それを担うのは私たち女自身であり、私たち女が力をつけ、国境を越えて手を結ぶことによって、この地域に新しい二一世紀の社会を作りたいと思います」（松井やより）

「私たちに必要なのは新しい『開発』です。女性として、私たちは現在のシステムに組み込まれたいとは思いません。その代わりに、現在の開発モデルが基盤としている概念そのものに挑戦したいと思っているしそうしなければならないのです。私たち自身、既存の枠組みから自由になる覚悟が必要です。

私たちにとって、フェミニズムがこの挑戦を可能にしてくれるのです。そしてこのことは必然的に、新しい知識の組立て、貧困層や被抑圧者、女性、そして自然との新しい関係を意味します。フェミニズムは新しい種類の空間を見出し、新しいやり方を捜し求め、新しい枠組みを新しいリズムを見出す可能性を示しています。フェミニズムは普遍的概念となったものから距離を隔てた転換であり、『進歩』と『開発』を問い直し、再定義することを求め、さらに私たちの生活のあらゆる側面でそれらについて新しい概念をつくり上げようとするものです。

新しい世界を求めるのに、新しい人間になろうとするのに、信じるために遅すぎることは決してありません。横浜に集まった女たちは、フェミニズムがあらゆるたたかいに新しい広がりをもたらすことを信じました。そして、私たちがフェミニズムを受け入れ、さらに私たちの方から新しい世界をめざすたたかいをフェミニズムでみたすことが出来れば、私たちすべてが変わるだろうし、人間も魚も鳥も海も川も木も自由に生きられる世界になるだろうと信じたのです」（ニガト・カーン）

（文責　加地永都子）